



TITLE:

「物理学国際会議録目録」について

AUTHOR(S):

一松, 信

CITATION:

一松, 信. 「物理学国際会議録目録」について. 静脩 1980, 17(3): 1-3

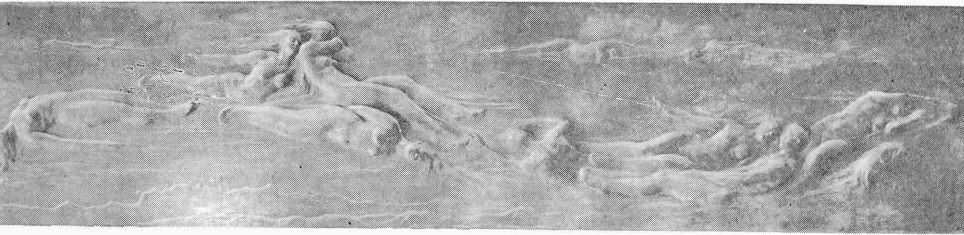
ISSUE DATE:

1980-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36882>

RIGHT:



静脩

1980年10月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 17, No. 3

「物理学国際会議録目録」について

数理解析研究所教授 一 松 信

昔から図書館所蔵の文献は、単行本と雑誌（定期刊行物）とに二分されていた。もちろん以前でも、年鑑、叢書、講座といったこの中間的な形態の出版物があったが、何とか上記のどちらかに編入しても、差し支えなかった。

近年になって、上記両者の中間的な準定期刊行論文集という形態の出版物が激増してきた。少くともいくつかの分野では、その重要性が、在来の雑誌や単行本をしのぐほどになってきた。筆者の関連する分野でいうと、物理学においては、研究の速報性が極度に重んぜられている。雑誌も月刊ではまにあわず週刊誌になってきている。プレプリントの類の配布が事実上の発表であって、在来の形式の論文が印刷公表された時期には、その内容は周知の事実になっていることが多い。また計算機科学は、新しい分野であるために、論文を発表する適当な媒体が乏しく、重要な研究が国際会議録の形で発表された例が少なかった。

このような出版物に載った論文は、検索しにくいことが多い。その理由の一つは、文献の引用が不備であって、不完全な情報から検索をしいられることが多いためである。他の理由は、在来の図書の配列法が、この種の論文集に対して不適切な場合があるためである。

こういうと、きちんと引用しない著者がけしからん、という話になる。しかし国際会議録のよう

な出版物の完全な書誌情報を書き上げることは、専門家でも容易でない。最も利用者にとって最も重要なキーワードが、著者名や書名ではなく、むしろ会議の開催地、開催年月日、会議の回数といった、普通の単行本にはない情報である場合も多い。引用された地名や年代が、その本の出版社の所在地と出版年であり、会議そのものの開催地・開催年とはくい違っていた例も少なくない。その上高額の論文掲載料を少しでも安くしようと、涙ぐましい努力をしている著者として、引用をできるだけ短くきりつめたくなる気持はよく理解できる。しかし余りに略しすぎると、少し専門の違う研究者には、略字が何を意味するのかさえ、理解できなくなる。

じっさいに、所属の機関の図書室でたずねたがわからず、他大学にたのんでコピーを作ってもらったが、後に偶然の機会に所属機関の図書室にもその論文集が所蔵されていることがわかった、という実例も、けっして少なくない。

もちろん一方では国際会議録出版責任者が、十分に注意して、容易に検索できるように必要十分な書誌情報を表紙や扉に書いて下さることを望みたい。しかし既に刊行されている分については、何とかして検索するための道具を用意するしかない。不完全な断片的な情報からでも、とにかくその論文集にたどりつける検索システムが完備すれ

ば、配列の問題も合わせて解決できる。というのは、極端に言えば、図書館内でどのように並べてあっても、一冊一冊の本来の場所がただちにわかり、すぐにそれを取り出せるものならば、利用者側には十分に満足できるはずだからである。

この目的には、在来の図書館カードは限界にきている。地名、時期、主題その他のいろいろの項目ごとにカードを作ったのでは、膨大になりすぎ、手間ばかりかかって利用されないはめになるからである。当面の解決策は、論文集の目録を作ることである。さらに進んで、書誌情報を計算機に投入し、各種のキーワードで検索できる体系を作り上げるのがよい。

こういう声は、あちこちから上っていた。はからずも1977年から、基礎物理学研究所、理学部物理学教室、数理解析研究所の図書室関係者の定期的な話し合いが始まった。そしてまもなくその席で、物理学関係の国際会議録目録作成を共同の作業として進める申し合せができた。

この作業は、ちょっと考えると簡単のようだった。三機関の図書室からカードを持ち寄り、つき合せてタイプすれば、主要な部分はできそうだった。ところが実際に始めてみると、そんな単純な話ではなかった。カードの記載方法の不統一もさることながら、会議録の表紙だけからでは、十分な書誌情報が採録できていない例が続出した。そのため原著にさかのぼって調査が必要だった。

そのうちに悠もでてきた。対象を定期的に行われている継続会議に限定したが、せっかくなら、各会議に解題をつけ、会議名の変遷、略称、愛称なども収録する必要性を感じた。上記三機関に所蔵されていない欠号分の情報も、できるだけ含めることにした。

そうしたことでも2年余りかかった。そのうちにこの目録は、京都大学以外の研究者にも有用であろうというので、中心になって推進して下さった基礎物理学研究所の小沼助教授のお世話で、基研で印刷し、関係諸機関に配布して利用していただくことになった。これが標題の冊子である。今回の1980年版は、一つの暫定版にすぎない。他の諸

大学での所蔵報もつけ加えたいし、何よりも欠号の情報が気になる。会議録が出版されなかったのか、既に発売元にも品切れなのか、それとも誰か出版した学者が個人的に所蔵しているのではないかと、といった類のことである。

しかし私達は、これを世界にも類のない珍しい目録だと自負している。今回も少数を外国に送ったが、もっと完備すれば、堂々と輸出できる出版物であろうと思っている。この内容を計算機に投入する作業も始めている。またこれと平行して集めた計算機科学、数学関係の国際会議録のデータベースも既に作成をほぼ完了し、大型センターでP I C M Sとして試用に供している。

データベースとしては小規模のものであるが、この作業に関係して、国際会議の「生理学」といったものを知ることができたのは幸いであった。正式の国際機関が何年かに一度定期的に開催を定めた「正式の子供」も少くないが、他の形態のものも多い。関係者が集って研究集会を開いたところ、有益だというので、2回目、3回目と開かれ、とうとう正式の国際会議になってしまった例が多い。他方、資金難とか、使命を果たしたとして、数回で廃止になった会議もある。2回開かれて立ち消えかと思ったら、数年後に第3回が開かれて、息をふきかえした形のものもある。こういう知識は、単にマニアが重箱の隅をつつく話ではない。そういった経過をよく知らないと、第何回という番号さえ正しく判定できないことがある。

また研究者の数や分野の性格の差により、たとえば数学と物理学と計算機科学とにおいて、国際会議の回数、規模、性格などが著るしく違うこともよくわかった。

しかしまことに皮肉なことに、現在までのところ私自身にとっては、この目録もデータベースも検索の目的には余り利用する機会がない状況である。というのは、この作業を熱心に進めた有能な何人かの図書室職員の方が、一千件余りの内容の大半を覚えてしまったため、計算機にきくよりも早くて確実な情報を教えてくれる場合が多いからである。これはある意味では大変に有難い状態である。

ある。そしてまた計算機を万能視するな、有能な人材をも忘れるな、という警告でもある。もちろんいつまでも、特定の人にたよってはいけなないのであって、だからこそ計算機による検索を研究しているわけである。

反面、研究者が真に必要な情報を適確にうるには、漫然と端末機の前に坐って計算機に問い合わせるだけでは不十分であり、よくなれた係員

の協力をうる必要が大きいことも痛感した。

ここに記したことは、かなり特殊な分野の特殊な研究者の話であるが、他分野の方々にも、情報検索について参考になる点があれば幸いと思って筆をとった。と同時に、本務の余暇にこれだけの仕事をなしとげた三機関の関係者の方々（というと私自身も含まれてしまうのだが）の御協力に感謝の詞をのべたい。

—— 解説・コンピュータによる情報検索① ——

コンピュータによる情報検索が時代のすう勢となっているが、京都大学大型計算機センターでは情報検索システム FAIRS (Facom Advanced Information Retrieval System) を用いて、研究上必要な情報や各種のデータなどが検索可能となっている。同センターで運用されているデータベースには、INSPEC (物理学, 電子・電気工学制御工学, 機械工学関係), XDCBIB (結晶構造), RIMS (数学, 物理学関係), DESY (高エネルギー物理学関係), SAO (16等星以上の星のデータ) 等々があるが, 9月8日からは PICMS (数理科学の国際会議関係) 及び ERIC (教育学関係) のデータベースの運用が開始された。

これまで図書館では、手作業で文献情報や書誌情報の検索を行ってきたが、このような情報検索システムによって、迅速・適確かつ網羅的に情報検索を行うことができる。また、コンピュータ端末機器の発達に伴い、電話回線を利用する方式等も普及してきており、図書館や研究室からはもちろん、家に居ながらにして情報検索を行うことさえ可能な情勢になっている。

そこで本誌では、図書館利用者のために、各種のデータベースについて初歩的な段階の解説を試みる。今回はその第1回として、ERIC について概略説明する。

ERIC (教育学関係データベース) について

教育学部図書掛長 村 田 修 身

1

ERIC は Educational Resources Information Center (教育情報源センター) の略称で、アメリカ政府の教育局 (U. S. Office of Education) が教育情報の収集と配布を目的として1965年に設立したネットワーク・システムである。現在はワシントンにある米国教育研究所 (National Institute of Education) に本部を置き、これがアメリカ各地に配置された16のクリアリングハウスその他の組織全体を統括している。各クリアリングハウスはそれぞれ特定の主題分野を分担して、情報を分析・評価・選択・抄録及び索引作業を行っている。

これら情報網を通して収集された情報は、(i)雑誌記事を対象とした CIJE (Current Index to Journals in Education) と、(ii)研究報告書や会議録等を対象とした RIE (Resources in Education) とに分けて、月刊誌の形または磁気テープによって頒布される。そこに収録されている文献の記述は図1のようになっている。

CIJE は1969年より教育諸科学及びそれに関連する雑誌約230誌を対象として発足したが、現在では700以上の雑誌が収録の対象となっている。1979年末までに収録された文献は、CIJEとRIEとを合せて約38万件にのぼっている。